

# 真野のむらのかみりく

昭和四十年 真野小学校卒業生

平成 25 年(2013)、大津市立北図書館でこの文集を見つけ、禁帯出のため数日をかけて写本し、誤字脱字と思われる箇所を修正したものである。これは文集の原本ではなく北図書館で再編集されたものようだが、図版等は付いていなかった。平成 27 年(2015)、文集としての著作権が切れるのを機会に、真野郷土史に興味のある人の入門書として公開させていただく。ページの配置等は原本と異なる。また、氏名については苗字のみ記載させていただく。

編集者 佐久間宗勝

## 目次

1	はじめに .....	5
2	佐川の記録.....	6
1	金の茶釜 .....	6
2	山の神.....	6
3	ちまきたべ.....	6
4	竜王さん .....	6
5	妙見さん参り .....	7
6	八大竜王 .....	7
7	殿墓 .....	7
8	渡月さん .....	7
9	佐川の恩返し .....	7
10	佐川の象.....	7
11	金くそ.....	8
12	黒い土 .....	8
3	大野の記録.....	8
1	しらんぼうの神様 .....	8
2	よる昆布 .....	8
3	とんど.....	8
4	おしょらいさん.....	9
5	こうみょうへんじょう.....	9
6	屋敷やぶ .....	9
7	大野の迷信.....	9
8	大野の方言.....	10
9	こうしんさん .....	10
10	銀ぎつね.....	10
11	明治のころ.....	10
12	大野の用水 .....	11
13	大野のみみずく .....	11
14	チャンギリ .....	11
15	おこりんぼの神様.....	12
16	おねぼうの神さま.....	12
17	どんどの火の玉 .....	12
18	水木 .....	13

19	しる田	1 3
20	大野のまつり	1 3
21	石碑	1 3
22	皇子塚	1 3
23	家の名	1 4
4	家田の記録	1 4
1	正院坊	1 4
2	家田という名	1 4
3	家田の生活	1 4
4	お火たき	1 4
5	家田の庄屋	1 5
6	家田の古墳	1 5
7	伊勢講	1 5
8	お百灯	1 5
9	あたご講	1 6
10	牛さま	1 6
11	筒入れ	1 6
12	明智祭り	1 6
13	融さま	1 6
14	宮の森	1 7
5	谷口の記録	1 7
1	こうしん塚	1 7
2	谷口の古碑	1 7
3	善い神 悪い神	1 7
4	桜塚	1 8
5	越路古墳	1 8
6	もち堀り	1 8
6	中村の記録	1 8
1	中村の八幡さん	1 8
2	中村の瓦	1 8
3	中村の迷信	1 9
4	地藏盆の夜	1 9
5	四ッ角の地藏さん	1 9
6	新堀	1 9
7	真野川の歴史	2 0
8	中村の病院	2 0
9	中組	2 1
10	川と名	2 1
11	湯あげ	2 1
12	豆はまめ	2 1
13	四の宮	2 1

14	稻荷山古墳 .....	2 1
15	一本松 .....	2 1
16	星の学者 .....	2 2
17	中村の水害 .....	2 2
18	中村の用水 .....	2 2
19	中村の藪 .....	2 2
7	普門の記録 .....	2 3
1	豪怒(ごうじょ)大僧正 .....	2 3
2	上の神田神社 .....	2 3
3	井戸の鳥 .....	2 3
4	神田の蛇池 .....	2 3
5	普門坊 .....	2 4
6	牛の刻まいり .....	2 4
7	宮参り .....	2 4
8	みこしと鏡 .....	2 4
9	十夜 .....	2 4
10	ひょうたん池の話 .....	2 5
11	こんぴら祭り .....	2 5
12	大塚山古墳 .....	2 5
13	六体地蔵 .....	2 5
14	普門の字の名 .....	2 5
15	馬場地蔵 .....	2 6
16	豪怒さんと悪人 .....	2 6
17	二条のお池参り .....	2 6
18	はか坂 .....	2 6
19	普門の道 .....	2 7
20	ごままき .....	2 7
21	神田の石灯ろう .....	2 7
22	十人衆 .....	2 7
23	普門の遺跡 .....	2 7
24	普門の迷信 .....	2 8
25	よい花、悪い花 .....	2 8
26	まんだら池 .....	2 8
27	まんだら古墳 .....	2 8
8	沢・北村の記録 .....	2 8
1	神田神社 .....	2 9
2	伊勢講 .....	2 9
3	ずっかい .....	2 9
4	多度参り .....	2 9
5	十七夜・さんやれ祭 .....	2 9
6	神宮寺の鐘 .....	3 0

7	ちごどこま	30
8	びしゃもん様	30
9	病気なおし	30
10	おぼうしん	30
11	えべっさん	30
12	真野の入江	31
13	榛原(はいばら)小学校	31
14	沢の八幡さん	31
15	ぎょうじ塚	32
16	歯車工場	32
17	真野小学校	32
18	真野小学校の校長先生	33
19	真野荘	33
20	真野の古歌	33
21	真野の宮座	33
22	真野城	33
23	沢の遺跡	34
24	北村の遺跡	34
25	一本松経塚	34
26	北村の墓地	34
27	北村のうら手開発	34
28	真野駅	34
9	浜の記録	35
1	女の十人衆	35
2	浜のずっかい	35
3	もちつき田	35
4	浜の船入れ	35
5	三宮式部長	35
6	浜の遺跡	36
7	浜の碑	36
8	真野水泳場	36
9	琵琶湖大橋	36
10	母子草	37
11	浮きはえ流しもち	37
12	真野の漁師	38
13	琴ヶ浦	38
14	真野川の合戦	38
10	おわりに	39

## 1 はじめに

昭和三十六年のころ、私たちは真野小学校の三年生であった。小学校の三年生は、社会科の学習で地域のひとたちの仕事なり、移りかわり、開発したひと、物資の交流などをとおして、地域をつかむことが目標で、地域の自然条件、社会条件に対して人々はどのように努力し、克服したかを調べた。ちょうど先生が滋賀県の社会科の手引書(指導書)の作成委員になられたので、夏休みに実地に社会研究をした。その結果、先生が考えられた「M村の農業」「K町の今昔」という単元が手引書にのっている。M村の農業は、真野の農業のことで、土地をどのように利用しているか、それが実際の土地を想定して書かれている。例えば、米造りには水はなくてはならないものだが、山手の佐川・大野の用水の引き方、浜手、即ち浜地区の湖水の逆水、そのほか、土地の自然条件に応じての農作物の生産などである。

K町の今昔は、堅田町の今昔のことで、何らかの事象や事件によって土地が変化し、発展する。例えば、江若鉄道ができて町がどのようにかわるか、ひとつの事象の前後を考究することによって、今と昔の差異がある。これが三年生ごろの歴史の勉強である。M村の農業、K町の今昔というふたつの地理的な、歴史的な勉強は、先生と私たちの実証によって生じたのである。今、県下の学校では、これらの単元を参考にして勉強されているのだと思うと嬉しい。

さて、三年生のとき、自分たちの住む真野の社会科的な見方を教えられた私たちは、四年になって郷土という広がりのある学習にはいった。

大昔のこと、郷土の開発、江戸時代の交通などであった。郷土を内側からのぞいていた私たちは、外側から郷土を眺めて様々な土地があることを見つけた。この年の学習発表会に、みんな一人一人郷土の記録をつけ、「むらのきろく」と題して発表した。

郷土を知ること日本を知ることだと思っていた。このころになって、三年から出発した郷土調査を何かまとめようと相談し、記録集を作成することに決めた。

五年生になって、日本の様々な特色を習い、自分たちの土地を、もう一度みなおし、六年になると日本の歴史という、今まで知り得なかった昔の変移をつかみとった。原始から現代に至る人間の営みを知ったのである。そして、昭和四十年三月、私たちは卒業である。四年間の記録を在校生に残そうと思い「むらのきろく」を作成した。社会、歴史だけではなく、まだまだ「むら」らしい真野の民俗・伝説も付記した。全部で百四十三項目である。真野は開発によって大きく変わる、せめて記録だけでも残したい。これがみんなの気持ちであった。六年間をあとにする気持ちは何ともいえない。このむらの記録にのってある歴史は真野の歴史であり、社会の出来ごとは、人間の努力である。民俗は、その土地土地に伝承された風習である。古い中にかつての真野村の村民の匂いが漂っている。民間伝承は、その土地の人間の姿がよく分かるものである。伝説、民話のたぐいは、口づたえによる昔語りで、その昔の人々のおそれ、おもしろさ、ねがいなどが浮きぼりにされるのである。地学は、この土地の出生を知るカギであり、人間の営みを支配する大地の歴史である。

言語の方言は土地の人の習俗として興味深い。いま、私たちは、歴史四十三、民俗五十、社会三十二、伝説十三、民話二、地学二、言語一の百四十三項を集録した。ひとり、原稿用紙平均二十枚、四十四人で九百枚に綴った。写真もとり、絵も地図も描き資料も整えた。

最後になって編集がうまくいかなかった。費用がないということと、時間のゆとりがなかったことである。卒業間際のため記録したものの半分以上をけずる破目となった。費用がないので手製となった。おいしいけれども自分たちの手で学習したことを研究し、執筆、製本するという。ま

た、特別の喜びを味わった。在校生のみなさんに贈るには、気のひける粗末なものであるが、かつて昭和四十年三月に卒業したものが「むらのきろく」という小冊子を作って卒業した。このことをおぼえて下さって、何かひとつ、郷土真野を知って、郷土の研究を深く探って下されば私たちの願いは達せられるのである。そして、今まで長いあいだ「むら」だったこの土地がものすごく発展するでしょう。その発展に、ついていける立派な人間として、これから成長してくださればうれしいきわみです。

私たちは何一つ兄として姉として、学校のため、郷土の真野のためにできませんでしたが、これから中学生として、またこの地の一員として努力いたします。「むらのきろく」を贈るにあたり、一言のべたわけであります。

昭和四十年三月十九日 卒業生 真野小学校 六年 四十四名  
代表者 三学期学級委員 日花 外男子 十八名  
学級委員 井上 外女子二十四名  
計四十四名

在校生のみなさんへ

## 2 佐川の記録

### 1 金の茶釜

私の住んでいる佐川に八幡のやしろがある。そのうらに竹やぶがあって、寺の跡が残っている。よくいわれる比叡山の三千坊のひとつで、織田信長の兵火によって焼失したという。寺の名前は不明であるが、その寺の住職が寺宝の金の茶釜を井戸に投げ込んだ。今、竹やぶに井戸はないが、竹やぶを掘れば井戸もあり、金の茶釜も出てくるという伝説を記録しておく。(高間)

### 2 山の神

毎年一月の初寅の日に、佐川の人々は山の神に祈る。山の神さまに、物を供えて佐川の山が安全であるよう祈るのである。この行事はいまも続いている。(高間)

### 3 ちまきたべ

例年、五月五日になると佐川地区の家々へ、ちまきが配られる。これは神社の当家人(十人)が、ちまき配りをする。ちまきは一家みなそろって食べる。家庭の幸福を念じながらである。  
(高間)

### 4 竜王さん

佐川の北東に竜王さんと呼ぶ祠がある。昔、佐川に雨が降らなくなると田畑が干しあがる。村人たちは松明をかざして藁で作った蛇を、肩にかついで竜王さんにお参りする。すると不思議にも雨が降ったという。竜王さんは雨ごいの神様である。(高間)

## 5 妙見さん参り

毎年四月になると、佐川では妙見さんに参る。必ず一家のうちから三人が参る。妙見さんには箱があって、その中にお箸がある。その箸を持って自分の年の数だけ寺を回る。坊さんが来て拝んでくれる。念仏が終わると箱を頭にのせるのである。何のために、このようなことをするのか判らないが、やはり成長の自覚と病魔を防ぐためであるらしいと考えている。(高間)

## 6 八大竜王

雨ごいをする竜王さんのことですが、八つの竜の玉を祀っているのでこの名がある。南北朝のころ、京都の如法寺の僧が佐川の方頭山に竜王を安置したという。祭りは一月六日の夜である。(岡本)

## 7 殿墓

いつのころかわからないが、佐川に殿墓という墓がある。その殿墓に眠っている殿様は、松村様というお方である。松村の殿様は佐川に雨を降らすために努力された人で、雨が降らないと自ら神に祈られたそうだ。佐川に雨とつながりのある話が多いが、真野川の本流よりはなれ 高台にあるので、天水に頼らなければならない。いかに佐川の人たちが水と戦ってきたかがよくわかる。(杉本)

## 8 渡月さん

昔、渡月さんという画家が佐川に来た。渡月さんは人間が死んだらこんな様子だろうと想像した絵を描いて死にました。(杉本)

## 9 佐川の恩返し

昔、佐川が大変な日照りにあって、米もみのらず正月も迎えることができなかったという。そのとき和邇のある人が自分の倉にある米俵を佐川の人たちに寄付して、佐川の難儀を救った。その翌年から佐川の人たちは、藁で作ったむしろや縄を和邇のその人の処へ持って行ってお礼を言う。数百年も続いたそうである。(岡本)

## 10 佐川の象

ナウマンという象の骨(シガ象の左下顎臼歯)が出てきたのは、明治のころで、藤田市松さんが発見した。発見した時はかますに二、三ばいもあったそうだが、今は一つしか残っていない。どこへ行ったか探したが見当たらない。このナウマン象の化石は百万年も昔のものだそうだ。

(高間)



## 11 金くそ

佐川に金くそという土地があつて、たくさんの鉄の板かすが散らばっている。佐川に鉄の取れる処はないが、その昔、鉄をとかして、鋳物を造っていたようだ。田んぼや土手は今でも金くそがいっぱいある。(岡本)

## 12 黒い土

佐川の上の方の田は黒ずんでいる。燃料のないときは黒い土を掘ってたどんにしたそうだ。大体、亜炭に近いものがある。この川の上流は化石林とよぶ。植物の化石が見られる。淡水の化石もたくさんある。地学の研究家がよく訪れる。(杉本)

### 3 大野の記録

#### 1 しらんぼうの神様

私たちの住んでいる大野に、しらんぼうの神様がいらっしゃいます。この、しらんぼうの神様は、ひとつの森を大事そうに持っておられます。村の人がその木を切ったり、その中へ入って荒らすと、おおこりになって、ひどい罰を与えられるというのです。村にいろんなことが起こっても、わしは知らんよーと知らん顔をしていらっしゃいます。しかし、私の考えでは、この知らんぼうの神様こそ、何でも知っていらっしゃる神様であると思えるのです。世の中には知らないのに知った顔をしている人が多いようですが、この神様は村人の進む道を知らん顔して教えていらっしゃるのではないのでしょうか。また、知らんぼうの神様は、いい宝物をお持ちで、正月の朝になるとお宮の屋根に一羽の金の鳥が鳴きます。「おめでとう」と。この金の鳥こそ知らんぼうの神様の宝物なのです。金の鳥は神社のどこかに埋められていて、一年に一度だけ村人にあいさつするのです。だれひとりこの金の鳥を見たものはありません。また声を聞いたものもありませんが、村の人は、金の鳥は確かにいると信じています。知らんぼうの神様と金の鳥、日本の民話より、どちらかというとな西洋風の匂いのする伝説である と先生は言っておられますが、興味ある話です。(小林)

#### 2 よろ昆布

大野では正月の朝の雑煮は父が炊きます。子どもは六時半ごろ起きて宮参りです。帰るとすぐにこぶ茶を飲みます。梅干しとこぶ茶を茶碗に入れてお湯を注ぎ、南西の方を向いてみんな飲みます。喜ぶこんぶ、つまりよろこぶとって縁起を祝うのです。それから父の炊いてくれた雑煮を楽しくいただきます。(小林)

#### 3 とんど

正月が過ぎた十五日の小正月、どこの家もかまどに火を焚く。三回「ポーン」と威勢の良い音が出ると、今年春から縁起が良いと手を叩きます。とんどは、門松・しめなわ・習字を燃やし

ますが、紙などが空中高く舞い上がりますと字が上手になるといい、火に当たると夏やせしないとか、とんどの火でもちを焼いて食べると夏も健康でしてくれるといいです。村の人たちは、年のはじめを大変気にしたものです。(小林)

#### 4 おしょらいさん

大野のお盆の行事は、さして変わったことはありません。寺で念仏を済ませてお下がりをもってきます。それを仏壇に供えてハスの葉の上に、さつまいも・柿・稲などの農作物をともに供え、八月十五日から十八日まで拝みます。先祖の精霊を迎え、一家団らん和やかに過ごします。全国どこにでも見られる風景ですが、仏教の国日本の夏の風物詩といえましょう。暑い夏もしばらく忘れず。(小林)

#### 5 こうみょうへんじょう

地蔵盆の夜、「こうみょうへんじょう、じゅっぽう世界、念仏なんまいだ」をなんべんも唱えながら、子供たちが大野の家を一軒一見巡回します。どこの家も戸を開けて米やお金をくれます。もらった米やお金で地蔵盆の費用にするのです。(小林)

#### 6 屋敷やぶ

大野には竹やぶがたくさんありますが、屋敷のやぶは昔、家が建っていたところです。屋敷のやぶの辺りには寺院があったのです。今でも寺の礎石とか石垣が残っています。石の大きさ、散らばり方を見ていると、かなり広大な面積を持っていたようです。瓦などの遺物を探していますが見つかりません。土の中に埋蔵されているようです。古老の口伝によると、室町時代に建立されていて、末期のころ、世に有名な織田信長の比叡山焼きの時、この地区の寺院も焼き払ったといわれています。大野は、もともと比叡山とのつながりが強く、この寺も比叡山の延暦寺、比叡山の三千坊と関係のある寺であったといわれています。戦国のころとはいえ、その土地の文化財は心して保存すべきであったと思います。今も万灯山の土を埋め立てのため使っています。万灯山とは仏教、すなわち寺の関係のある山だと先生は言っておられます。土地の開発のために、重要な歴史の遺跡は取り壊されていくようです。文化財を皆で守りたいものです。(小林)

#### 7 大野の迷信

みょうがをたくさん食べると馬鹿になり、しょうがをたくさん食べると鼻血が出る。カラスが悲しそうに鳴くと、その方向にあたる家の人や誰か死に、カラスが嬉しそうに鳴くと、その方向に当たった家の女の人や赤ちゃんを生む、めでたし。猫が顔をこすれば天気はずれ、目をこすれば雨が降る。正月に富士山となすびの夢を見ると良いことが重なり、いやな夢を見ると悪いことが起る。うそ泣きをすると母に死に分かれ、鼻紙を火の中にくべると発狂し、かまどの上に刃物を置くとけがをする。一番星が出た時に、自分の一番大事な願い事をいうと望みがかなう。星が流れた時、ともに天に向かって飛ぶと身長が高くなる。夢の中で他人の死んだ夢を見ると長生きし、縁側を昼間、上がったたり下がったりすると人が死ぬ。数字の四はし、だから死に、九はく、

だから首をつる。水を入れてから熱い湯を入れるのはよくない。お湯を食べると、今日一日安全に暮らせる。朝、虹がかかると天気がしまけて、夕方、虹がかかると、あすは晴天となる。迷信もいろいろあって、なるほどと思うものもあり、おもしろい。特に大野にだけあるような迷信を私は記録した。(野間)

## 8 大野の方言

わんら、しらんで=私は知りません、おまはんら=あなたたち、でっかい=大きい、どすのう=ですね、(野間) ままくおか=御飯を食べようか、いぬ=帰る、よさい=夜、ええもん=お菓子、おき=火のくず、おてしょう=さら、じょうこ=あぐら、みてみやい=見なさい、どじまい=低い下駄、くちなわ=へび、えんげ=縁先き、いかき=ざる、みぎべら=右側、あんな=あのね、ぶとい=太い、(小林)

## 9 こうしんさん

こうしんさんの日になると、私たちはもちを二つずついただきます。昔は、こうしんさんの近くの土の中にもちが入れてあって、それを掘って食べたそうですが、今はそうではありません。こうしんさんは農業の神様であります。大野の墓地の近くにあります。(野間)

## 10 銀ぎつね

大野に銀ぎつねの墓があります。昔、銀色のへびが大野に現れました。長さは三メートル位あったそうです。銀ぎつねがへびに化けたとか、大野の主だとかいってうわさしたそうです。

(小林)

## 11 明治のころ

買い物は堅田へ行った。牛車のうしろに乗ったり、ぶらりと歩いて行ったりして、一日仕事だった。一銭で五厘玉という口いっぱいあめが二つも買えたというのです。一円もあると手にいっぱい品物が買えたというのです。着物は三円くらいでじゅうぶんだったようです。ご飯が足りないと、いもご飯を食べたり、ひえやあわのご飯も食べていたということです。弁当は麦ご飯でした。服そうは着物です。下足はわらぞうりで、子供でも自分のはくぞうりは作っていたのです。醤油(しょうゆ)は豆をいって、皮をむいて、麦をむして一週間程度ねさしておく。麦一升到塩五合の割合でかき混ぜると、それはおいしい醤油が出来たといえます。味噌も豆をたいて、もちつきばちに入れてこねてつくります。納豆づくりもします。この納豆は田んぼの牛肉といわれる程栄養があります。そのころの人々の生活は自給自足、自分の家で生産したもので自分の家の生活ができるよう考えられています。だから、年間の見通しを立てて、味噌、醤油、漬物など作っていました。生活は華美でなくあくまでも質素であり、勤勉でもあった訳です。特に、農家では労働が激しいので塩分をとるため、塩の消費量はかなりありました。今でも、おつゆや煮付けの類は一般に比べてからいようです。子供のおやつも、つるし柿、いり豆、いり米などでした。インスタント時代といわれるこの頃、ビニール袋の製品よりも自分の家で作ったもの、例えばに

煮しめなど格別の味のあるものです。日本人の食生活は植物性に片寄るそうですが、動物性のたんぱくも食べ、伝統ある田舎料理も大切に残して、日本人の体質に合った食生活を送りたいものです。食べるということがどれだけ大切であるか、大野の人たちは、かまどを神聖なものとして今でも大切にしています。それがよくわかります。(小林)

## 12 大野の用水

大野といえば字の通り大きい野原です。真野川の中流付近の平地に田畑があります。江戸時代初期から大野の米はおいしいと注目され、農民は耕地面積を拓げるために真野川付近の平地より離れた台地にも田畑を作りました。今も残る大野のだんだん畑がそれです。しかし、米造りには水が必要です。水がなければ稲は育ちません。天水に頼って自然任せです。室町時代から始まっている寄り合いを江戸中期には何度も開きました。大野に用水を作る相談です。田畑より下に流れる水を上げる訳には参りません。真野川は、はるか下に流れています。そこで、地区の西方に伊香(いか)立(だち)という土地があり、その向在地(むこうざいじ)の辺りを流れる真野川の上流に井関を造り、取り入れ口としたのです。快く向在地の人たちは協力してくれました。しかし、取り入れ口から大野まで二キロメートルはあります。それから村人たちの用水路を掘るための努力は続きました。男はもちろん、老人も女も子どもも石運びをしました。ようやく、二年目の五月、用水路は完成しました。ちょうどその年は干ばつです。梅雨といっても雨は降りません。大野の用水路の井関は開けられました。音を立てて流れる水、田畑に入る水、部落の人たちは、小躍りして喜んだというのであります。苦勞の甲斐があったとはこのことを言うのでありましょう。それ以降、大野の田畑三百反をこの用水路は育ててきたのです。今も向在地へのお礼のしるしとして大野は年貢を納めています。土地の開発者の努力には、私たちは頭が下がります。大野の土地は高低が一定していません。水は高くから低きに流れます。その原理のため、曲がりくねった用水路、石垣、くい、その一つ一つに、かつての用水路完成に努力した村人を思うのです。(小林)

## 13 大野のみみずく

大正のころまで、大野のみみずくが沢山いたそうです。夜になると大野の森からみみずくの鳴き声が聞こえてきて、「ああ、今日も鳴いた。森も夜になったのだ。」と村の人は話しながら床についたそうです。みみずくの外、うぐいすなどの小鳥も森にはたくさんいて、さながら小鳥の天国だったようです。このごろではあまりみみずくも小鳥も見当たりません。森が荒らされたせいでしょうか。巣箱を作って小鳥の楽園を再現したいものです。(野間)

## 14 チャンギリ

チャンとは父のこと、ギリとは殺すこと。チャンギリ、即ち父殺し。ぶっそうな話ですが、大野にはチャンギリという地名が残っているのです。屋敷やぶに伝承する戦国時代の話。室町時代の中ごろから足利將軍の実権がとみに衰えてきて、諸国の大名が割拠(かっきょ)します。下剋上(げこくじょう)の風潮が漂い、家来が武將を殺し、武將が大名を殺す。下の者が上の者を倒して勢力を握ることあります。ここ大野の寺坊は天台宗に属する僧兵が数百人、寺を守護していた。

天下を統一しかけたのは織田信長で、信長は天台延暦寺に対して快く思っていない。その一つの理由に、かつて近江に軍を進めたとき、浅井・朝倉の連合軍に手痛い目にあっている。その助けをしたのが比叡山の僧兵である。信長は一大勢力を持っていた比叡山の寺院を武力でもって焼き打ちする。比叡山ばかりか、付近の天台系の寺社はすべて焼き払えと命を下した。そのため、大野にも信長の軍が攻めてきて寺を焼いた。そのときに僧兵の指揮をとっていた寺坊の僧がよく戦った。信長はその僧の子に使いを出し、父を殺したときに子及び関係者を助命すると伝えた。その僧の子は、父をある夜、殺すに至った。もちろん降伏したのであるが、信長方に走ったという僧の子は、その後その存在を見た者も聞いたものもなかった。父と子の戦国時代の悲劇の一コマである。父すなわちチャンを殺す。そんな話が口伝されている。名前もわからない。(野間)

## 15 おこりんぼの神様

おこりんぼの神さまは山の地藏様のことです。この神様はお魚が好きで、村人はどんな魚でもいいから三尾供えます。供えないとおこりんぼの神さまですからお怒りになります。どうした訳か、供えたらすぐ走って帰るそうです。(野間)

## 16 おねぼうの神さま

大野の近くに小さなやしろがあります。ぞうの宮と呼んでいます。この宮さんは、おねぼうで朝の十時ごろでないと起きないといひます。その時刻になると宮さんから白い水が流れてきます。米をかした水だろうと言っています。旅子(たびこ)さんを祀っていますので、おねぼうの神さまは旅子さんのことでしょうか。平安時代、藤原氏は栄えていました。藤原の族は望月の欠けたることなし というほど全盛にありました。当時、宮廷の女官でありました藤原旅子が人気があったのは、顔がきれいというばかりでなく、美しい心の持ち主だったからです。評判が高くなりますと人のねたみがあります。「旅子さんは一年中、たびばかりはいて素足を見せたことがない」という噂が宮廷に流れました。そのはずです、旅子さんは実際素足を見せたことがなかったのです。とうとう噂がうわさをよんで、旅子さんはたびをぬがなくてはならなくなりました。実のところ、旅子さんの足は鹿の爪だったのです。その夜、旅子さんはお供を少し連れて、大原、途中を越え大野に来られたのです。村人の親切が大変うれしく、その後、居住し、亡くなります。だから旅子さんはこの地に祀られたのです。伊香立の還(もどろ)来(き)さんも同じ旅子さんを祀っています。還来は戻る、帰るという意味ですが、旅子さんは都へ帰りたくなかったでしょう。(野間)

## 17 どんどの火の玉

気味の悪い話ですが、江戸時代、今のせと川橋の端にどんどの杉と呼ばれる、それは大きい杉の木があったそうです。必ず夜になると杉の木に火の玉が出るということです。ふつうの火の玉は墓地が通り相場ですが、実のところこの火の玉は大きなくもが火を点けていたそうです。くもが火を点けて 信じられませんが、これも伝承として記録しておきます。日本の怪奇伝承に土ぐもがよく出て参りますが、これもその一種といえると思います。どんどは水が豊にあるという意味だそうで、水と火、何か人間の生活に一番大切なもののとりあわせであるので興味があります。

## 18 水木

大野は昔から二階を建てるとき、山に生えている水木という木を天井にあげて、神主さんに拝んでもらいます。水木の字のとおり、火事を防ぐまじないであるといひます。その他、母屋とか倉にも「水」の字をいれます。これも火災予防のためでしょう。(野間)

## 19 しる田

大野の田畑の中には地下水がつい近くまで来て、清水を出しているところもあって、俗に、湿田、しる田と呼んでいます。裏作の麦を作るときなどは、湿っているとよくないので田んぼを干します。そのために竹を切ってしる田にさし、水はけをよくするのです。そういう田んぼの稲を干すときは山でします。今も、くいが残っています。(野間)

## 20 大野のまつり

大野の春祭りは五月五日で、みこしがある。みこしがあるのは現在のところ、大島の河内神社だけである。みこしをかつぐときのしきたりや、ならわしも昔のままでとり行っている。みこしは、神さまが乗っているというので、白装束でみこしをかついで部落を巡ります。昔は秋祭りの一つに牛祭りというのがある、日は十月五日ですが、その日になると牛を美しく飾って宮に参らせ、広場で牛の品評をします。売るのはなしに、牛に感謝し、よく育った牛を見せ合うのです。大野は牛を使って農耕しますので、このような牛祭りもあったのでしょう。(小林)

## 21 石碑

第二次世界大戦に続いて太平洋戦争がおこり、たくさんの方が昭和二十年までに兵隊となって戦地に行かれた。戦死した人もあった。昭和二十四年、これら二十二人の戦死した方を祀るために石碑を立てた。石碑の中に穴を掘り、亡くなられた人たちの写真と戦死した場所を書いた紙を瓶に入れて埋めた。穴は後でろうで固めた。(小林)

## 22 皇子塚

みこ塚という。今を去る一千三百年ほど前、天智(てんじ)天皇(てんのう)が近江の滋賀里(しがのさと)の付近にお造りになった都は、わずかの年月ですたれてしまった。天皇がおかくれになって、その子大友皇子と、天皇の弟さんの大海人(おおあまの)皇子(おうじ)の間に争いが起こったからである。大友皇子は近江の軍をひきいて戦い、瀬田川の戦いで敗れる。従者数人を連れ、大野の地に逃げ、乗っていた馬のくらを木にかけ自刃(じじん)する。今もくらかけの木の下を流れる真野川を長良川と呼び、山の地名を山前(やまざき)といっている。大友皇子を祀る神社は大津にも堅田にもある。歴史の本には大友皇子、敗走し山前にて死ぬ とあると先生から聞いたが、今のところ長良が正しく、山科、堅田は伝説だとみられている。まして、真野大野の皇子塚もそ

うであろう。しかし、塚・円墳の古墳が存在する限り、大友皇子か誰か掘ってみて中の遺物を確かめたいものである。埋蔵文化財はみだりに発掘できないので調べてほしいと思っている。場所は大野のはずれ、南庄との境界にある。景色のよいところで山全体に木が繁っている。(小林)

## 23 家の名

大野の家の名は大体決まっています、みんな親戚のように仲がよい。小林・野間・大芝・小谷・河原・生津(なまつ)・田中・森口・上坂などが家の名で、自然の山、森、谷、川にちなんだ家名が多い。これは純農村として発展してきた大野の土地柄のためであろうと思う。近年は様々な職業が増えてきた。これから、どのように発展するのだろうか。(小林)

## 4 家田の記録

### 1 正院坊

比叡山の三千坊の一つに正院坊と呼ぶ寺があった。今はないが家田にあったといえます。そのあとは藪や田畑になっていますが、地名に残っています。例えば堂の上、堂の前、庵の下、中の堂などです。地名から推定すると、本堂と左右の堂、それに一つの寺院の様子がわかります。かなり大きな本堂です。今の若宮神社の付近一帯です。跡のよくわかる瓦や石探していますが見つかりません。(鈴鹿)

### 2 家田という名

昔、家田は南庄に属していた。南庄の東、今の家田のあたりは田畑があっただけである。南庄からこのあたりまで農耕に来るのが遠いため、田のために家をつくろう、すなわち田の家、つまり家田の地名が起こったのである。だから家田の神は南庄の神と同じで、源(みなもとの)融(とおる)を祀っている。融(とおる)神社がそれである。源融は近江の国司で、特にこの地を愛され、よい政治をされたという。村人は融侯によく従い農に励んだという。はじめに移り住んだのは八軒で、今は倍の十八軒で小さな部落である、つい最近まで南庄の山野の草刈りは許されていたし、今も南庄の祭りにはおこわをいただいて食べるという風習が残っている。(鈴鹿)

### 3 家田の生活

家田の部落は真野地区の西方にあり、北に真野川が西から東に流れている。家田の所有の田畑は十三ヘクタール、畑 五ヘクタール、山林 百ヘクタールで、山処といえる。用水は湯川から取ってくる。家田の西、五百メートルのところに、湯川と呼ぶ川の取り入れ口があって、そこから用水を引き、田の用水や、農作物に使った道具を洗っている。近頃は老人、女が農に従い、男は外に働くことが多くなってきている。(鈴鹿)

### 4 お火たき

新穀感謝祭というのがそれである。毎年十一月二十八日には、今年一年間の農作物のお礼として、若宮神社で神主さんと巫女を頼んで、大きな釜に湯を沸かして、赤飯のおにぎりを作りお供えする。このおにぎりは、もち米一八リットル、小豆七・一リットルの割合で二十七日の夜、宮番の家が蒸して、翌日家田中の女の人が宮番の家へ集まり、家田の人数分だけにぎりめしを作る。それをみんながちょうだいする。そのほか野菜なども供え、式後は白酒を飲んだりします。しかし、子供はだめです。宮番は次の年のお火たきまでお宮の行事を受けもっていきます。この宮の行事は古くからある宮座の形式で、特別古い株座の形ではなく、室町時代から江戸時代に発展していった村座と呼ばれる形式に属するものとみられます。(鈴鹿)

## 5 家田の庄屋

ぼくの家が庄屋でした。徳川幕府は庄屋にその土地を管理させ、村人を五人衆という形に組づくりさせました。その村の上に代官がいて、直接幕府につながっていました。堅田や真野は堀田侯が納めていましたから、堀田藩に属していたといいますが、家田は天領だったわけです。代官は東条代官で、中塚家が止宿となっていました。ぼくの家には江戸時代の庄屋の面影を残す書付け、マント、きゃはん、弁当類などが残っています。庄屋は村人のために代官に年貢のことなど頼みに行く必要があったからです。庄屋は村人のために一命を捧げる という心で苗字、帯刀を許され、厳格な生活を送っていたといえます。明治維新の訪れとともに庄屋はなくなり、今は村の一員として、家田が良くなるようお互いに協力して、村の発展のために尽くしています。(鈴鹿)

## 6 家田の古墳

家田の真野川沿いに古墳が五基あります。いつごろのものかわかりませんが、だいたい大和時代の中ごろ、西暦六、七百年の頃のものと思われる。この真野は大和民族の流れをくむ、真野族が古代文化の華を咲かせていましたので、その系統の人たちの古墳だろうと思います。すべて円墳で盛り土がしてあります。(鈴鹿)

## 7 伊勢講

家田の部落には伊勢講という講中があって月の十六日には当家に集まって天照大神、伊勢の皇大神宮を祀っています。積立金をして、年に一度くじ引きをします。当たった人が三人代表で伊勢に参ります。おふださんなどをこの人達がもち帰って配ります。(鈴鹿)

## 8 お百灯

字の通り灯を百つけるのでこの名があります。五月一日の夜に宮に集まって、かわらけ百個全部にたね油を入れて、お光を点じます。かねてから火は神秘的なものとされていますが、この百灯の輝きもそのような気持がします。また百灯を天神さまに供えることによって、家内安全を祈り、豊作を念じます。親里、南庄の祭りの日にもあたるわけです。(鈴鹿)



## 9 あたご講

この講中は火の用心を祈ります。月の二十三日にします。十二月二十三日は、もち米、小豆、砂糖を持ち寄り、ぼたもちをつくってあたご様に供えます。この日は火の用心だけでなく、豊作の感謝もすることになっています。年に一度、三人の代表が京都の愛宕神社に参っておふだをもらってきます。

## 10 牛さま

家田の牛捨場は北海橋の下の竹やぶにありました。今は中堂というところに埋めます。家田では牛を大切にしています。「家田の人は牛にも様づけする」という言葉が残っているくらいです。長いこと牛肉は食べないことにもなっていました。牛は農耕になくはならないもので、一家の一員として大切に飼育していたのです。「家田八軒物居所、牛のランにも捧げる」面白い言葉です。(東)

## 11 筒入れ

天神さまは子供の神様です。みんな天神子といひます。筒入れというのは正月に書き初めを書いて、その筆を竹の筒に入れて天神さまに捧げるのです。そうすると字が上手になるといひます。(東)

## 12 明智祭り

お盆の七日から地蔵盆まで、寺の庭に高い高い丸太を立てて先端を松明にし、二十日余りも燃やし続けます。今はこの風習はすたれましたが戦争前まで続いていました。この灯明の火は家田に帰ってくる先祖の霊を慰めるばかりでなく、実のところ明智光秀をひそかに祀っているのだと先祖から言い伝えています。京都本能寺において天下掌握の寸前、織田信長は明智光秀に殺されています。光秀のことについてよく言わない人もあります。美濃の名族土岐(とき)氏の流れをくむ光秀、近江坂本城の城主の時の事件でありました。世にいう逆賊光秀ではなく、坂本城主として近在の治政に秀れた手腕を振るいました。年貢を安くしたり民の和を図ったりして民政に努めました。堅田城主を一時つとめたこともあります。戦国の世、光秀は不運にも命を落としましたが恩恵を受けた農民は光秀を尊敬しました。天下は豊臣となり、徳川に移ります。かつての主人を想う村人は、精霊迎えに乗じてこのような行事を残したと口伝しています。また、明智光秀が山崎の天下分目の戦いで敗れ、弟佐馬の介も安土城、坂本城に火をつけて自刃、部下の多くはともに自刃しましたが、ひそかに葵のしるしのある笠を手に入れた近在におちのびたといわれます。堅田にも、真野にもあったようです。これを明智落ち、葵落ちといひています。笠と刀などをこれらの人は家宝にしていたようです。その人たちも家田に住みついたのかもわかりません。(東)

## 13 融さま

藤原朝臣源融は近江の国守であり、善政を為された人として家田では神様のように崇めていま

す。平安時代の初期の人で京都の河原町辺にご殿をもっておられたので河原大臣という別称もあります。あの有名な宇治の平等院は藤原頼通が建てたもので、仏教美術の華と言われていますが、もとはこの融侯の別宅だったのです。融侯の礼拝石というのが家田の宮さんに置いてあり、老人は拝みます。宮さんといえば、いまだに宮座が存在しています。袴着六人衆と呼ばれるのはそれです。着座するとき、右座と左座に分かれ座します。右座三人、左座三人、右座六人、左座六人、左座六人と時代の移り変わりに応じて変化しています。融侯が平安初期、今から一千年前の人ですから、ずいぶん古い伝統を家田は持っていることになります。

## 14 宮の森

宮の森は小さな山になっています。ふつう森と呼んでいますが県の人々の調査では、大化の改新のころの古墳だということです。古代文化のかぎを握る古墳の発掘が行われると家田の古代もわかるでしょう。(東)

## 5 谷口の記録

### 1 こうしん塚

谷口の奥に入ると、「てんどの上」という処がある。そこに大きな松の木がそびえている。その木の根の辺りを掘って、村人はお祈りする。松の木にさわるとこうしんさんが罰を与えるというのである。こうしんさんのことを知らん坊の神ともいっている。このこうしん塚のあるところに工場を建てようというので、つい最近、こうしん祭が行われた。土地をなぶってこうしんさんを怒らせないように という老人の意見によってである。(日花)

### 2 谷口の古碑

谷口の中塚さんの畑から古碑が出てきた。一メートルもある石塔の五輪の塔でもある。碑文は道海禅門(元文六年四月二十日) 妙諸禅尼へ(天文六年六月一日) 道明法師(天文二十一年正月二十二日) 妙 禅定尼(慶長五年八月十二日)とある。天文といえば、西暦一五三七年のことで、今から四百年ほど前である。禅門法師は格の高い僧で、尼は女の方であろう。室町時代の混乱した時期で、將軍は足利義晴・義輝・義昭で、織田信長、豊臣秀吉が台頭してきた頃である。これらの石塔の人は谷口の寺、西勝寺と関係があったに違いない。西勝寺は天台真盛派に属し、寺坊の門は豊臣秀吉ゆかりの人の寄進によると伝えられている。(日花)

### 3 善い神 悪い神

地蔵盆には「ずず」廻しというのをどこでもする。この谷口のずずまわしは、悪い神と善い神があって、二ヶ所しるしがつけてある。善い神が訪れると撫(な)ぜ、悪い神が訪れるとポンとたたく。悪い神とは農作物を不作にする神で、善い神とは豊作にする神のことである。また善い神は子供を幸せにし、悪い神は不幸にするという。(日花)

## 4 桜塚

普通、大友桜と呼んでいる。大友黒主の姫の桜姫が眠っている墓だと伝えている。井上仁三郎さんの所有田になっている。大友黒主は平安時代の歌人で、六歌仙の一つに数えられている。平安の頃の郷は、南から大友郷・真野郷・小野郷・比良郷で、この地は真野郷に属するが、大友氏の別宅があった様子である。普通、日本レースの工場の裏手の山を大友山という。桜姫については詳しいことは分かっていない。(日花)

## 5 越路古墳

この古墳の名を「こしじ」とか「こえじ」とかというが、「こえじ」というのが正しいと先生は言う。越路古墳は谷口の村落を越えて行くと、堅田天神山および仰木に通じる路が続いている。その両わきに、転々と広がっている小山がすべて古墳なのである。群集古墳ともいう。先生は入り口から古墳の番号を打たれたが、全部で五十基ある。中から終りに行くほど古墳は立派で、その玄室は幅五メートル、長さ十二メートルに及ぶのがある。盗掘された古墳も多いが、いまだ二十基ほど完全に残っている。この古墳に眠る人たちはこの地を支配していた家族で、今のところ真野族の系列にある身分の高い人の古墳だとも、大友氏の古墳だとも唱えられている。詳しいことは発掘して研究してみないと分からない。(日花)

## 6 もち堀り

昔のこと。十月九日の早朝、一番どりが鳴く頃、村人総出で宮に集まる。もちほりをするのである。五人衆がもちを入れておき、一斉にもちを取らせる。一番たくさんとったものには、村一番の元気者だということで衆がほめる。おもしろい風習もあったものだと思う。(日花)

## 6 中村の記録

### 1 中村の八幡さん

毎年、九月十五日に八幡さんの祭りがある。八幡さんは武士の神で、八幡大明神のことです。八幡太郎義家のように、八幡さんを祀る処は源氏とつながりがあるといいます。だからこの祭りも、強さを示すために奉納角力(ずもう)を行います。近在から角力をとる人が集まって試合をします。近頃では子供がします。さて、面白いことに「みこの釜」というものあって、巫女が湯をわかします。「や、さ、でんでんでん」と湯を沸かしながら、巫女は太鼓をたたきます。太鼓の拍子に合わせてみんなが湯を飲むのです。残りの湯は、みなもちかえって家族全部がちょうだいします。無病息災家内安全のためです。(瀬津)

### 2 中村の瓦

古い時代の瓦が中村ではよく出ます。地名に観音田、寺崎、ぜんぞう寺などがあります。奈良時代のころの瓦器が中村から出土していますし、同時代の軒丸・布目瓦が観音田から発掘されて

います。また平安時代のころの布目瓦・軒丸も出土しています。ぜんぞう寺が奈良時代から平安時代にあったものと思われます。本坊はいなり山の辺りで、寺門は川端のあたりで、かなり広い寺坊が想像されます。礎石などはまだ発見していません。(瀬津)

### 3 中村の迷信

晩、口笛を吹くと泥棒が来る。茶わんをたたくと貧乏神がおどる。牛の道具をまたぐとまたが腐る。夕方、からすが鳴くと、きれいな虹ができる。しょうがをたくさん食べるとあほになる。便所をのぞくとカラスになる。もらいものを人にやると雨が降る。(瀬津)

### 4 地蔵盆の夜

この夜になると、その年死んだ人の前に立って、たいこをたたきます。はじめは寺で四回、次に辻の地蔵で二回、そしてその家で一回たたきます。死者を慰めるのです。たいこをたたく人が来ると、その家の人がうちわで仰ぎます。(瀬津)

### 5 四ッ角の地蔵さん

四ッ角の地蔵は辻り地蔵とも言います。地蔵盆になると、白い布で地蔵さんを飾ります。そして自分の家、兄弟姉妹の名前と年を書いて地蔵さんをお願いします。災難よけのためです。その日は、いい音を出す鈴もつけます。近ごろは、自転車の通行も激しく危険な場所ですが、一度も事故がありません。地蔵さんが安全を守っている と人々は信じています。昔の人ほどその考えは強いようです。もともと、地蔵尊は土地を災いから救うために信仰されたもので、今もこの考え方は変わらないのです。(高見沢)

### 6 新堀

中村は交通の要処であったといえます。そんなこと信じませんという人もあるかもしれませんが、本当のことです。元来、物資は湖や川を利用して運ばれていました。葛川・伊香立・真野の木炭、農作物、わら工品などは、牛車や船で中村の新堀に運ばれ、ここから堅田の沼(かやという内湖)に通じ、琵琶湖に出て堅田・坂本・大津・木の浜・八幡・和邇などに運送されていたのです。室町から江戸時代にかけて、真野市(いち)という市が立ったものです。場所はここです。地元から集散されたもの、他地方に送られたものをその時の相場で値をつけるのです。手筒のような布を、売る人、買う人の手にかぶせ、指を握りながら値段を決め、両者一致したとき握手するのです。この真野市も明治になるとすたれますので、運送一本となります。もっと大じかけに交通の流通を図らねばなりません。中村の人たちは一致して内湖に通じる掘割を拡げるため、新堀といって新しい川を作りました。三年の歳月がかかったといえます。主に辻から南の方の部落人たちです。今でもこの部落を新堀と呼んでいます。新堀を掘るために家財道具一式を売却して、これにあてたとも言います。昔の人は骨身みを惜しまないところがあって、私たちもこのような点を学びたいものです。そのため、明治・大正と中村の新堀運送はにぎわいました。昭和になってトラックなど陸路の交通が発達しますと、この新堀も衰えます。大正十二年に江(こう)若(じゃ

く)鉄道がとおり、堅田駅ができ、翌々年真野駅が設置されると、なおさら物資は汽車輸送になります。今も残る堀を見て、かつての堀の全盛をしのぶのみです。(高見沢)

## 7 真野川の歴史

地図を見て驚くことは、琵琶湖の突き出たところが二か所ありながら、他方に川がないことです。つまり中村の東に普通、浜先と呼ばれている地には、真野浜があり。真野川が流れています。川がデルタ地帯をつくるという、土地造成の見本に従っています。さて、出島といわれる今堅田も湖に突き出ていますが、川がありません。自然に突き出して地形ができたという考えかたは納得できません。そのはずです。出島の方にも川はあったのです。真野の古文書の類は、元龜・天正のころの戦乱で焼失していますので、古地図などは残っておりませんが、堅田にある古地図には、はっきりと真野川が描かれています。それによりますと、比良山の南端、伊香立の山手から端を発した真野川が、中村にいたって二つに分かれ、北流して真野浜をつくり、南流して今堅田を造っていたのです。そういえば、今堅田の部落には廃川と思われる河川が部落を横切っています。ちょうど琵琶湖大橋はその中間のところに建設されているわけです。東に位置する野洲川が、北と南の二流を有していることから考証されます。西と東から、山の手の土を運び日本一の琵琶湖を両方から狭め、琵琶湖の最狭の地を形成しているのです。また、近江盆地の野洲デルタ、真野デルタを作り、江州米と呼ばれる良質の米を産出しているのでもあります。真野川の歴史は、この土地の歴史であり、この土地の母でもあります。川を利用する真野村の人たちは、川に感謝しなければなりません。さて、大きく時代を区分して、真野川周辺の記録を記しておきましょう。先史時代から何百万年も前、琵琶湖は古琵琶湖と言われ、今よりずいぶん広がった。伊香立に生津という土地もあるように、真野川はまだできていなかった。古代すなわち二千年前ぐらいになると、真野のあたりまで川ができてきて、沢、中村の処まで伸びてきた。縄文時代の人々たちは川の流域で魚貝を求めて生活していた。大和時代から奈良時代になると、南流、すなわち堅田へ流れる川が大手筋で水量も豊かで堅田の土地を造ってゆく。川の自然堤防に人が住みつき生活するようになる。堅田は地名の通り、湿田が干潟になり、良田、堅田になってゆく。その希いが地名になったのであるが、また堅田の先祖は真野からの移住によっている。堅田の古文書に「マノノ漁師、カタタに居そめて漁をし渡しもりをする」というのがあり先生から聞いたが、このことをよく証明している。さて北流の方は平安までは沢、北村あたりで、あの有名な真野の入江は、沢と北村の間であるからである。北流が浜のあたりにのびてくるのは、中世、鎌倉、室町、安土桃山で、現在の浜の部落ができたのは、江戸時代からである。とすると、いつごろから南流が廃川になるのだろうか。先生に聞くと江戸時代からで、南流の川の周辺を開発し、田畑にしたそうである。江戸時代以降には南流の川は消失し、逆に田畑が増加していることによっています。明治・大正時代は北流の真野川が盛んに洪水をおこし村人を困らせる。そのために流れの方向を昭和になってかえ、中村地区に通過させないで、まっすぐ現在のように流す。その先端に水泳場ができ、琵琶湖大橋がかかっているのである。(高見沢)

## 8 中村の病院

明治から大正にかけて中村に「隔離病院」というのがあった。伝染病にかかった人が入る病院

で、その近くを通ると病気がうつると恐れられていた。この病院は、今は堅田の山手に移っている。そのころを思い出させる薬が八幡さんの池の近くにほかしてある。(瀬津)

## 9 中組

ふつう中村を真野と言っている。これは真野の中に中組の真野と沢、北村、浜の四ヶ村あったためである。四組を総称して真野という。部落内に山がなく、平地でもっぱら田畑の仕事に従事している。(摂津)

## 10 川と名

昔、真野川が通っていたので川に関係した家の名が多い。瀬津は川の瀬、津の意味。川端は川のそばという意味だろう。

## 11 湯あげ

湯あげというのは釜の湯に笹を入れて炊き、その湯をくんで飲むことです。この湯あげは、どうしたわけか坂本の女の人になっていました。坂本の巫女(みこ)ですから日吉神社の流れをくむ行事だろうと思います。湯あげをするときは八幡さんの祭りの日です。(森)

## 12 豆はまめ

中村は豆を大切にします。栄養があるばかりでなく、豆はまめに通じるからです。まめまめしく働く、というふうに。よい豆をとるときは豆を箕(み)に入れてふります。転げ落ちた豆がよいとされています。昔は豆でいろんなものを作っていました。豆腐、あげ、おから、みそ、しょうゆ、納豆、お菓子などです。米と豆があれば、一軒の家はなに不自由なくおくれたのです。(森)

## 13 四の宮

ぼくの家は中村の西のはずれにあります。その横を四の宮と呼んでいます。宮の地名が残っているので、きっと宮さんがあったのでしょう。瓦や石を探していますが見つかりません。(森)

## 14 稲荷山古墳

中村の南のはずれに稲荷(いなり)山古墳があります。だれの古墳かわかっていませんが、だいたい大和時代の頃のものと思われています。直径五メートルくらいの円墳です。面白いことに、円墳の周りに溝が掘ってあります。上は茶畑です。ふつう古墳は南東の方に入口の穴があるものですが埋まっています。発掘調査してもらおうと何か出てくるに違いありません。(森)

## 15 一本松

中村の東のはずれに一本松があります。西近江路の里程を示す一本松で、第二室戸台風で松の木が倒れて、今は寂しい姿をしています。一本松は経(きょう)塚だともいって大切にしています。経塚とはお経を筒に入れて埋めてある塚のことです。しかし先生の意見では、塚ではなく目印の地で、本当の一本松経塚は、こんぴら山の東にある一本松の方がそれらしいといっています。(森)

## 16 星の学者

中村に中村要(かなめ)という人がおられました。京都の同志社の学校を出て、京大の天文学教室に入り、天文の研究をされました。大正から昭和にかけてです。天体を発見されたのは彗星が二つ、遊星が九つ、変光星が一つで全部で十二個も発見しておられます。また中村鏡・中村望遠鏡もつくられました。立派な天文学者がおられたわけです。私たちもこのような人になりたいと思います。(川崎)

## 17 中村の水害

明治二十九年の水害は、滋賀県下でどこでも水害を受けましたが、当時、中村地区も低地であるので、山手の方に逃げました。ひと月以上も水が引かないので弱りました。その四、五年前も水害にあっています。中村は琵琶湖の水の氾濫(はんらん)だけでなく、真野川の氾濫(はんらん)もあるので大変でした。そのたびに川の修理に村人は努力しました。今は川の流域を変えたのでだいぶ楽になりました。(久保田)

## 18 中村の用水

今は水道がついていますので用水には便利ですが、水道のないころ、中村は用水を使用していました。この用水は家田のあたりから竹で引っ張って、一軒一軒の家の前に流しています。洗い場というものも作って、家庭の台所用品を洗っていました。しかし、上が濁ると水は美しくないもので困りました。不思議なことには日照り続きであっても、この用水の水は枯れたことがないのです。よほど上手に用水を作ったにちがいありません。この用水には水車がかかっていました。この用水の小川と水車の音を聞くと、全くのんびりとした村が想像されます。この静かだった中村も琵琶湖大橋がかかって田畑が売れ、今まで葛屋(くずや)葺(ふ)きだった家が赤瓦、青瓦の近代的な家に変化していっています。夜は琵琶湖大橋のナトリウム灯が万灯のように東の空を照らしています。移り変わる真野中村の今日このごろです。(久保田)

## 19 中村の藪

真野川のふちに藪がたくさんあります。部落に入っても藪があります。藪は川の堤防があった場所を今も教えてくれます。藪の根は土をしっかりと押さえて場所を守るからであります。また、北西の季節風をさえぎる屋敷森のかわりにも使われていました。しかし、中村の南西の方にある竹藪は川のためでなく、大和・奈良時代にあった私寺、つまり古い寺のあった場所です。竹藪は古い歴史を秘めている場所でもあるといえます。この竹藪の竹を使って目(め)籠(かご)など農村で使う道具に使ったり、竹の垣に使ったりしていました。竹藪の竹の子は春の祭りのごちそうで

もありました。その竹藪の姿もだんだんなくなり、家が建っていきます。竹藪がなくなると、中村はその姿を変えることでしょう。(谷)

## 7 普門の記録

### 1 豪怒(ごうじょ)大僧正

曼荼羅山の金比羅大権現を開基した僧で、文化十二年二月です。本当は文化十三年二月だと伝えられます。豪怒さんは普門の地が元来仏教と縁が深く、曼荼羅山も由緒があり、金比羅を祀ることによって、この地に平安を念じたのでした。豪怒さんは文政七年四月二十四日、九十二歳で亡くなられましたが、生前金十両を普門に寄進されました。今の石碑はそのうちの五両を使ったのでした。石碑の字は豪怒さんの字であります。(井上)

### 2 上の神田神社

真野には二つの神田神社がありますので、普門の神田神社を上神田神社といい、沢にあるのを下神田神社と呼んでいます。上の神田神社は旧国宝で現在は重要建造物という重文に指定されています。再建されたのは建徳元年でそれが今でも残っています。本殿は室町風の流れ造りで、簡にして要、なかなか立派なものです。祭神は馬務台忍勝、天足彦(たらしひこ)国押人(くにおしひと)命、彦国菫(ひこくにふき)命の三柱です。口伝によると承平二年、西暦九三二年、平将門が「うんじゃく」姫の病気快ゆを祈り、翌年姫の病気が治り、そのお礼として承平三年、本殿建立とあります。平将門が乱を起こすのが天慶二年ですから、乱をおこす六年前のことです。関東で乱を起こした将門と普門の神田神社が何ゆえに縁があるのでしょうか。先生の見解によると、天慶二年、将門の乱に際し、伊香(いか)立(だち)竜華(りゅうげ)関を閉じるという正史の記事があるとのことで、普門のこの地から竜華まで通じています。平将門の一門の関係者がこの地にいたため、何の関係もない関を閉めたのだと私は思いました。ちなみに竜華の関は近江の古関三関の一つでもありました。ともあれ、重要文化財という立派な遺物を先祖の方々が残して下さったのだから、私たちも文化財を大切にしようと思います。(井上)

### 3 井戸の鳥

普門は字の通り寺坊で、曼荼羅山を総坊にし、各地に坊がたくさんありました。が、元龜・天正のころ、織田信長によって焼失しました。つい最近まで井戸寺という深い井戸が残されていて、寺の井戸だと語り伝えてきました。その井戸のそばで元旦になると金の鳥が鳴くのだとも付け加えておりました。だれも見たものはありません。(井上)

### 4 神田の蛇池

普門の神田神社の森に大きいため池がある。これを蛇池と呼んでいる。江戸時代、日照りが続き田んぼの稲も干し上がって枯れる寸前という年があった。村人たちは、蛇池の竜神様に二十一日間願をかけた。満願の日、恵みの雨が降ったといわれます。それ以降、村人は竜神の社を建て、



雨ごいの神様として祀っています。また、おもしろい伝説もあります。それはある日、この蛇池に女の人が立っていました。美しい人です。村人が見に行くと女の方は大蛇になって池の中に入って行きました。その後、二度と女の方は姿を現しませんでした。竜神伝説の類でしょうか。  
(井上)

## 5 普門坊

普門にはたくさんの寺がありました。まず有名なのが同性坊です。この坊は天台三千坊の一坊で、平安時代にあったものです。今でも同性坊山と呼んでいます。馬場五州さんが、この跡から香炉二個を発見しています。同性坊はのちに真宗に改宗して浜に移り正源寺となっています。この寺の本尊が同性坊の本尊だと口伝しています。また「しんちょう坊」という坊も存在したといわれています。寺前という地形は、たけのはなにある。たけのはなというのはとりでの意味で、寺を守る石塁があったにちがいありません。遺跡の研究によって寺坊を明らかにしたいと思います。

## 6 牛の刻まいり

民間伝承の一つで、牛の刻、つまり午前二時を指しています。この時刻に奇妙なことをするのは、女の方がある男の方を嫌いな場合、この時刻に白装束して頭にろうそくを立て、こしらえてきた藁人形に木のくぎを刺します。すると男の心は変るといいます。しかし、この秘密のこめた姿を見られたとき女の方は死ぬといえます。牛の刻参りという女の願いをあらわした風習は実際にあったのです。宮の木にまだ木の釘が残っていますから。(井上)

## 7 宮参り

明治、大正のころ学校では十五日に宮参りをし、歌うのだったそうです。「心を磨き、身を収め、すすみゆく世、国の光をいやそせん」と。学校においても氏の子として神前にぬかついたものです。今も神だながありますが、遠い昔の日本の流れがみられます。(西)

## 8 みこしと鏡

上の神田神社は重文に指定されているほど、立派な宮さんですが、みこしがありません。昔はあったのです。ある夜、盗難にあったというのです。ところが翌年の祭りの時、堅田のおいが橋という橋を渡ろうとした普門の人が川の底に光っている神輿の鏡を見たそうです。普門のみこしは湖の底にあると伝える話です。(西)

## 9 十夜

毎年十一月二十日の夜、十夜と言って老人、子供が寺参りする。仏の国の迎えを心静かに待とうとする、一種の宗教の風習です。老人はお坊さんから来迎の仏の話を聞きます。死後の世界、つまり冥土を想うわけです。信仰に生きていますと、黄泉(よみ)の世界は楽しいものだといひます。お説教や老人向きの幻燈がすむと赤飯の握り飯を食べます。老人と子どもがいただきます。

静かな夜長のひとときです。(井上)

#### 10 ひょうたん池の話

ひょうたんの形をしているので、こう呼んでいます。普門の土地から少し離れたところにあるので、昼でも静かで気持ちが悪いそうです。むかし、このひょうたん池をすみかとする天狗がいて、池の魚を食べたとか、河童が池の底にいて人間を食べるとか、この池にまつわる話はかなりあります。(井上)

#### 11 こんぴら祭り

毎年四月十日にこんぴら祭があります。この日には普門全部がこの山に登り、祝います。金比羅山は普門の守護山として昔から崇めているためでありましょう。昭和三十九年の四月十日は、豪怒大僧正が金比羅大明神を開いてから百五十年になるので、社を新しく建て直して盛大に行事をしました。(井上)

#### 12 大塚山古墳

金比羅山にも古墳が十数基ありますが、とくに有名なのが大塚山古墳です。この古墳から出た鏡などは皇室にあります。古い中国の文字が掘ってあり見事なものでした。土地の人は、大塚山、金比羅、家田、谷口につながる古墳は一連のもので、大和朝廷と関係のある真野臣、小野臣の一族の墓と信じています。(井上)

#### 13 六体地蔵

普門には地蔵が大変多いです。昔、寺が多かったせいでしょうか。地蔵信仰というのは平安時代から盛んになっていくと先生から聞きましたが、村の大事な処、大切な道にあります。金比羅山に通じる道に六体地蔵が安置してあります。この地蔵は村を災いから救うとして、今も花や菓子を供え、手をあわしています。(井上)

#### 14 普門の字の名

普門地区を三つに区分して、上出、下出、木の下と呼んでいます。上出は上の部落、下出は下の部落、木の下は、いなりさんに昔大木があって木の近く、すなわち木の下とよんでいます。土地台帳には上出、木の下が明記されていず、下出だけになっています。俗称なのでしょう。その他の地名に、庄の本、おとの本、との口、寺前、竹の鼻、陣処などがある。寺前は平安時代に存在した普門坊のなごりで、竹の鼻、陣処などは鎌倉、室町の陣屋を意味しています。庄の本、おぎの本は部落のもとじめにあたる意味を示しています。先生によると地名、とくに古名は昔の歴史を解くカギだとおっしゃっていましたので、いまのうちに年寄りの人から聞いて記録しておこうとおもいます。(奥野)

## 15 馬場地蔵

普門の上にある、まんだら池を田畑の用水池にするために江戸時代中期に掘りました。そのとき、土の中から地蔵さんが出てきましたので、これを馬場地蔵に祀りました。土の中から出てくる石を地蔵が出たといって村人は大切にしましたものです。(奥野)

## 16 豪怒さんと悪人

昔、普門のまんだら山にこんぴらさんをお祀りになった豪怒さんの話です。ある夜のこと、豪怒さんはお弟子さんと呼んでいった。「明日は、悪人どもが私の寺に参るから、たくさんご飯をたいておくように。」と。翌日になると豪怒さんが言った通り盗賊がやってきました。寺にある宝物を盗んで帰ろうとします。そこへ豪怒さんが現れて「好きなものは何でもあげよう。物をとるとおなかもすくだろう。ご飯の用意ができているから、食べて帰りなさい。」といった。盗賊の頭は「物をもらってその上ごちそうにあずかるとは、これはけっこうなこと」と言いながら、子分といっしょに食べました。ところがたいへんたくさんご飯が炊いてあるので盗賊の頭は豪怒さんにその訳を聞きました。「わしはおまえらが今夜悪事をはたらきにくるのを知っていてご飯を準備したのだ。」と豪怒さんは答えました。悪人たちは自分らのすることはみんな知っている、このお坊さんはたいへんえらいお坊さんに違いない、と驚き、改心して悪人をやめてしまって、まじめな人になることを誓いました。その後、この悪人はよい行いをして豪怒さんに仕えたというのです。豪怒さんというお坊さんの徳のわかるお話ではありませんか。(奥野)

## 17 二条のお池参り

この二条は京都の二条のことです。普門地区は昔から水に困っていました。真野川はこの地区の南のはずれを横切っているためであります。ひょうたん池・まんだら池・宮池など鎌倉時代と江戸時代の用水の開拓の流行した時代に掘りましたが、池の水に恵まれない田畑はずいぶんありました。そこで、二条お池参りという雨ごいをやったものです。雨の降らない年は、普門地区の若者を、京都二条のお池に竜神を祀る寺があつて一週間から十日願をかけ、二人ずつ組になって京都から普門へ、ごへいと火なわを駅伝競走のようにリレーしてもって帰ります。そして普門の宮に点じて村人衆は雨ごいをします。不思議と雨は降ったといひます。近年このような民間伝承はみられません、つい最近も参ったといひます。しかし、リレーはせずに拌みにだけ行きました。(奥野)

## 18 はか坂

普門には、はか坂という処がある。坂に沿ってたくさんの墓があつたのでこの名があります。近年工事中に壺や刀剣、土器などが出てきた。寺に關したものが多く、はか坂を天台三千坊の寺跡ではないかと人々はいっている。その広さ、構えなども調べてみたいと思っています。それとこのはか坂は、急な坂ですから、土地の人は荷車を押してあがるのが大変で、ばか力があるのでばか坂とよんでいます。はか坂つまりばか坂。おもしろい話です。(谷)

## 19 普門の道

今の道は巾も広く便利ですが、昔の道はふみ分け道といって、人がふんでいるうちに道になったのが多いようです。普門の本道は葬式のとき通る道が大切な道だったのでしょう。興味深いことには地蔵のある場所をつなぐと、まんだら山や宮に通じます。この道が普門の本道といえます。昔は寺・山・宮を重く見ていたわけです。(下野)

## 20 ごままき

ごままきをするのは宮寺です。一年に一度だけありました。当番は二人で、宮寺のごまたきの用意をします。ごままき、ごまたきどちらもいいです。ごまをたいて厄をはらうのわけで、主として老人が参加して厄払いをしました。(山名)

## 21 神田の石灯ろう

神田神社に江戸時代の石灯ろうが二基ある。元禄三年四月、真野又兵衛、享保十六年五月、真野甚右衛門の二つで、寄進された人は真野校長先生の先祖の人である。二つとも品のよいつくりであると先生はいつておられた。(平井)

## 22 十人衆

十人の人が集まって宮の行事をする。普門には十人衆がいまだに残っている。古老の順番になっている。春のこんぴら祭や元旦の宮行事などを行う。ふつう歴史的には宮座の発展した形の村座という形式になっていて、村のことも相談する。(杉本)

## 23 普門の遺跡

普門には遺跡が多い。このことから推して、歴史上重要な地であることがわかる。時代別に検証してみると、古代の原始時代、縄文時代にこの土地に住んでいた人たちが使用したとみられる石斧(おの)、石鏃(じり)、石鎗(やり)が発見されている。なお、貝塚遺跡もこの地に残っているという。なぜなら普門地区の田畑、とくに東の方より昔の貝殻が地中から出てくることによっている。石器類と貝塚を研究すると、普門の古代人の生活が究明される訳だ。ついで米つくりの伝来した弥生時代、当時の土器が発見されている。大和時代の遺物はとくに多い。普門坊の全盛と照らしあわせて興味深い。祝部(いわいべ)土器の類は数えられない位だ。杯(はい)、高杯、つぼ、(はそう)装飾付土器などである。すべて真野小学校の資料室に保管してある。奈良時代のものはいまだに発見されていないが、平安時代になると普門同性坊より香炉が二個発掘されている。またつぼも出ている。鎌倉時代になると石釜が発見されている。この時代の水がめ、すりばちなどの日常生活を知るものも出ている。南北朝時代には重要文化財である神田神社が再建され、室町、安土桃山は戦乱の地となったため、遺物はなく、江戸時代には神田神社の石灯ろう、金比羅大権現などが残っている。各時代に渡り、遺跡のあることは誇りにしたい。県文化財目録、埋蔵文化財にも普門の各遺跡について記載されていると先生から聞いた。(馬場)

## 24 普門の迷信

針を折ると死後、針の山をわたる。女の子が三人で四人目に男の子が生まれると、体が弱く早死にするという。豆やいもを食べるとき皮をむくと、死んでから石の皮をむかなければならない。ものさしでたたかれると三年目に死ぬ。(西条)

## 25 よい花、悪い花

豪怒さんにまつわる話です。ある日、一人のおばあさんが豪怒さんの処にお花をさしあげました。豪怒さんは一つ一つ花をながめてこうおっしゃいました。「この花はうれしくいただいておきますが、この花はもって帰ってください。」と。おばあさんはびっくりしました。もって帰れといわれた花は途中で盗んできた花でしたから。よい花、わるい花を区別され、悪い行いをしずかに諭す。豪怒さんという坊さんは、たしかにえらいお坊さんだと思います。(西条)

## 26 まんだら池

まんだら山のふもとにある池で、江戸時代中期に掘りました。みんな総出で開拓したのです。このまんだら池が出来てから普門の田畑はたいそう助かったということです。用水池をつくる苦労はなみたいていのことではありません。よくやったものと感心しています。さて、この池はふつうの池とはちがって工夫がしてあります。池のなかに大きな四角の木が沈めてあります。この木に何本も竹がささされていて、それを加減して遠くの田畑まで水をやるように考えられています。また池の取り入れ口から大事な池のぐるりは、まんだら山の天井石を使っています。いまもその石をみると古墳の石だということがすぐわかります。(諏訪)

## 27 まんだら古墳

まんだら山には古墳が多いです。主として円墳で穴は南東にむいています。先生に聞くと、古墳の穴が南に向いているのは死者の魂に太陽を入れるためだとのこと。中央に玄室があって死者と、死者が使った用具などがいれてあります。その上に小石でふき石がしています。ふき石をおいてあるのが天井石で大きな板石がかぶせてあります。土や草などでおおわれみつけにくいですが、下のほうから探すとみつかります。中には盗まれた古墳もあって石がごろごろと散らばっています。十基ぐらいはあります。このまんだら古墳から、いなり古墳、きつね塚とつづき、その頂上に滋賀県でも有名な大塚山古墳がそびえています。つづいて唐臼山古墳、石釜古墳、ゼニハラ古墳、ヨウ古墳、小野古墳と百数十の古墳が群集しています。大和時代のものです。小野族、真野族の古墳です。小野妹子も出ているくらいですから由緒のあるものです。さて、この古墳群一帯が開発されます。重要な古墳は残したいものです。(諏訪)

## 8 沢・北村の記録

## 1 神田神社

嵯峨天皇、弘仁二年(八一一年)に藤の木に鎮座し、祭神は産土神彦国菴命である。現真野家のご先祖に当たる。神田神社は古くはミトシロのカミのヤシロとよび、伊勢内宮の御供田に属していた。延喜式神名帳に近江国滋賀郡八座の中に神田神社と名が記され、住吉真野臣の先祖を祭神とするとある。新撰姓氏録右京皇別の部に、真野臣は夫足彦国押人命の孫、彦国菴命の子孫である。その系統の大矢田宿弥が、神功皇后の三韓征伐に従って新羅に渡り、征伐後その地に残り鎮守將軍となる。新羅王猶の女と結婚して二人の男子をもうけ、兄を佐久命、弟武義命という。佐久命より九代目の子孫の和珥部臣、鳥努合肆忍勝ら部下を引具して真野に定住する。持統天皇より真野臣の姓をうける。古事記、日本書紀にも同様の記載がある。隣郷に小野族が居たが、ともに大和の春日臣の系統である。この真野は懇田を意味している。神田の社記は前記のとおりであるが、真野氏の中の長者が神主をしており、この仲間をモロト仲間という。奈良時代は興福寺関係で後宇多天皇、弘安二年に鎌倉將軍、惟康親王の寄進で別当神宮寺と護摩堂を創立し、天台系となる。伏見天皇、永仁年間に神司真野氏は近江守護、佐々木六角に属し神殿を改修し、神田を寄進、織田信長の延暦寺焼き打ちのとき焼失する。明暦二年(一六五六)、新しい社殿を造営する。  
(平野)

## 2 伊勢講

沢は南北二つの講中がある。毎年四月、九月、十二月に伊勢大神宮を祀る。講中の人たちでくじびきし、代表者を選び、翌年の四月一日に伊勢に参る。この人たちが神の田の耕作する。  
(平野)

## 3 ずっかい

ずっかいとは男女三歳の幼児を祝う儀式である。三つ子の魂なんとかとおるのように、三歳児をひとつの節として祝ったのである。日は十二月八日、赤飯と甘酒で祝う。家での祝いが終わると宮に参り、先祖様に成長ぶりを報告する。(平野)

## 4 多度参り

沢に雨が降らないとき、伊勢の多度郡多度神社に参拝してご神火を頂だいし、昼夜をわかたず神田のやしろで太鼓を叩き、雨ごいをする。この時、ご神火を消してはいけないのである。  
(平野)

## 5 十七夜・さんやれ祭

一月十七日の夜から十七夜、またそのときサンヤレ(幸あれ)とさけぶからサンヤレ祭、両方いう。昔は「こうざい祭」といっている。もとは沢の真野一族の行っていた行事であったが、明治維新後は沢、北村、中村の組全体の行事となってきた。この行事は中、沢、北村の男子が一本ずつ松明を点じて神社に参拝する行事である。藤の木から現在の地へ神田神社を移転した時の模様を再現しているのである。各組の男子は藤の木に集合する。集合の順序は沢が先頭で中村、北村

がそれに続く。全部そろった時、「サンヤレ、サンヤレ」と踊るのである。この夜は特に寒さが厳しくあるが、行事に従う若者は負けてはいない。もともと真野神社の神、彦国菫命は荒行を好まれる神で勇ましいことを喜ばれる。万灯のようにたいまつをかざして行列は続く。昔はもっと盛大であつたらしいが、いまは静かな行列になっている。この松明の火は夏痩せに効くというので火にあたる人が多い。(平野)

## 6 神宮寺の鐘

正応三年、矢田部宗次作と銘のある古鐘は神田神社の神宮寺の鐘である。室町時代の戦国の世、真野氏は佐々木六角方に属し戦った。この鐘は、対岸兵主の兵主神社に一時納められていた。明治になって浜出身の三宮式部長が取戻され、いま浜の正源寺にある。(平野)

## 7 ちごとこま

真野の祭日に氏子からちごをだす。沢は南と北と二年交替に出す。大体三才～五才までがふつうで、白い着物に赤い袴をはいて行列する。そのちごにつくのがこまで馬のことである。こまの前を横切るとこまにしかられる。(都)

## 8 びしゃもん様

あのひげをりっぱにはやしたびしゃもん様のことです。びしゃもん様は勇敢ですから、沢部落にかかる悪魔を追い払ってくださいます。沢のうら寺の山がびしゃもん山です。山の神仏が土地を守護する一つの伝承でしょう。(都)

## 9 病気なおし

梅干しと砂糖を混ぜた中に熱い湯を注ぎ、その湯を飲んで梅干しの皮を額にあて、汗を出す。頭痛、かぜにきくという。体のどこかに熱がたまったとき、彼岸花の根をおろしかきでおろし、のせると熱がにげるといふ。きずをしたとき、よもぎでもんでのせておく。傷がなおるといふ。医者のがなかつた昔から続く、家庭治療の一つの方法です。科学的に見てどうか聞いてみたいです。

## 10 おぼうしん

一人前になることです。二十五才までに九斗の米を村に出します。一年目は四斗、二年目、三年目は各々二斗五升です。米を納めた者は、十七夜のとき赤ずきんをかぶって宮参りが許されず。今は米よりも金になっています。(西条)

## 11 えべっさん

ぼくの家の前にえべっさんという神様がいました。神さんの正体はほんとうはへびで、丸い池で水を呑んでいました。このへびはここらを守る神でした。えべっさんという大黒さんの事を

思いうかべますが、このえべっさんは土地の主という意味で守護神のことです。今は神田神社の方へ移しかえました。(森)

## 12 真野の入江

昔は沢の帯に入江がいくみ、湖に写る比良山の暮雪がひととき美しく、さかさ比良と、はるかな沖の島が真野の入江でみごとな組み合わせとなり平安時代の大宮人がよく来たという。金(きん)葉(よう)集の歌人、源俊頼(としより)朝臣は「うずら鳴く 真野の入江の 浜風に 尾花なみよる 秋の夕暮れ」と詠んでいます。そのころ真野の入江はまた鶉(うずら)の名所でもあった。平安時代から鎌倉時代にかけて、真野の入江は、北国への国司の赴任や朝廷への献上物の往還、竹生島明神への参拝、対岸湖東への渡しなどで栄えた。謡曲「竹生島」にも入江のところが出てくる。「...真野の入江に船よばひいざ、さしよせて こと問わん...」と。また謡曲「八景」には「真野の入江は江夫の暮雪だ」と真野の暮雪をあげています。これによると八景の一つに数えているわけです。歌にもたくさんある。新古今和歌集の源頼政の歌「近江路や 真野の浜辺に 駒とめて 比良の高嶺の 花をみるかな」、続千歳和歌集の宗行の歌に「冬の水の 尾花おしなく 降る雪に 入江もしほる 真野の浦風」真野の入江の顕彰が近年行われ、都定さん、西上富造さんらによって顕彰碑がたてられた。文章は横山先生で書は真島先生です。入江跡は都尚一さんの所有田で、中央に入江桜という木が一本と地蔵尊が祀られている。今は湖岸線が浜手にのびているが、昔の浜辺がこの地だとわかり興味深い。(森)

## 13 榛原(はいばら)小学校

沢に榛原小学校があった。先生が三人で生徒が三十人位でした。明治八年六月に開校されて上等と下等がありました。この学校へは普門・佐川・真野の三部落の人が通学していました。先生の給料は米でした。しかし、二階建てで三十六坪の教室です。家田にも学校があり、篤誠小学校といひます。この学校へは大野・家田・谷口の三部落が通っていました。二階建ての十四坪の教室です。明治十二年九月に高等・普通科、十三年十二月に高等・中等・初等となり、十九年十一月に榛原、篤誠の両小学校が合併して簡易科真野小学校が出来ました。十一年の間にこの学校におられた先生は、橋本岩記、黒川良平、村田幾次、山田計寛、藤村松之助、岩佐亀次郎の八人でした。篤誠の方は加村春斉、山名宗論、宮脇隆興、岡橋先生の四人でした。私とこの母屋に榛原はありました。(川中) 右写真は3代前の宗太郎が榛原小学校に寄付をした時に県からもらった礼状

## 14 沢の八幡さん

私とこの近くにあります。八幡宮と書いた石の碑が立っています。昔は八幡さんに奉納角力をしたそうです。八幡さんはその昔、源氏が尊宗した神で、なかなか勇ましい神です。どうして沢に祀るようになったのでしょうか。それは源氏とつながりがあったからだといひます、中村にもあります。いまはだれも祭をしません、私の家では時々何かを供えるようにしています。

(川中)



## 15 ぎょうじ塚

沢の藤の木に小さな塚があって、その場をさわると祟りがあるといっています。きっと神聖な場所だったに違いありません。塚は何か埋まっているといいますから何かがあるのでしょう。

(川中)

## 16 歯車工場

昭和三十八年に歯車工場が大阪から真野の沢に移動しました。工場では減速機を作っています。減速機というのはモーターの回転をおそくして力を強くする機械です。使われるところはエレベーター、エスカレーター、リフトなどです。工程は、一、設計をする。二、木型を作る。三、鋳物で木型どおりのものを作る。四、加工する。五、仕上げをする。減速機には二つの歯車が使用されている。一つはウォームギヤーでもう一つはベレルギヤーです。ベレルギヤーは直角のものを回転させる歯車のことです。(小野)

工場が出来たのは大阪の庄内で、昭和八年です。三十年間大阪にいて、こちらに移転したのです。この工場の敷地は約九千九百平方メートルで、工員は約百五十人ぐらいです。やがて湖西線も通り、原料・製品の輸送がスピード化され、ますます工場は発展することでしょう。ぼくたち生徒は大阪と違って静かで空気のよいところにきたのですから、勉強が落ち着いて出来、よろこんでいます。(三好)

## 17 真野小学校

榛原・篤誠小学校が明治八年六月に出来ていますので、現在九十年になります。真野小学校の発足は、明治十九年十一月で、それより八十年になります。真野小学校ができて三年目の明治二十二年六月、真野村が生まれています。二十五年四月から真野尋常小学校となって尋常科三年、補習科一年とができました。三十四年四月から高等小学校が出来ました。三十八年四月に本校舎が出来、工賃は六千七百円でした。百四十坪の校舎です。大正九年七月に運動場を拡張し、昭和二年二月に二階建てを増築、十六年四月から国民学校、終戦後の二十二年四月から現在の真野小学校、二十七年に体育館が出来、三十年四月に一町四村合併して堅田町となり堅田町立真野小学校となる。この年五月に校舎の改築がなり、二階建て一棟八教室ができる。工事費七三七万円でした。三十四年一月に便所ができ、三十五年に体育館に暗幕、三十九年にピアノが新しく購入、校歌ができる。作詩西条皎、作曲中原邦夫先生「あおい湖、緑の野山、窓のほほ笑む、仲よしこよし、学ぶたのしさ きたえるからだ、よいこの学校 この学校」という歌である。この年の十月からはじまった東京オリンピックに母校出身の真野一夫選手が活躍し、フェンシングの部で団体四位入賞する。全校あげて応援する。昭和四十年三月現在校長真野忠、教頭我谷賢治以下先生七名、生徒数二二二名でこの年の三月十九日「むらのきろく」完成し、ぼくたち六年生四十四名が卒業し別れを遂げる。(都)

## 18 真野小学校の校長先生

一代目は明治十九年齊藤梢先生、二代岩佐亀次郎、三代折田作次郎、四代林寛、五代島津重登、六代早藤莊六、七代齊藤彦脩、八代奥村尊吉、九代鈴木卯之助、十代大友公憲で、明治時代を終わり、続いて大正になると大正二年まで大友公憲、十一代筒井乙松、十二代伏木次郎、十三代蒲生厚美、十四代我谷賢三 大正を終わり昭和にはいる。我谷校長が昭和四年まで続く。十五代須佐見幸太郎、十六代藤谷美作、十七代中村宗市、十八代辻川甚三郎、十九代倉見勇、二十代村上善六、二十一代辻口作次郎、二十二代大隈半左衛門、二十三代結城実誠、二十四代山下専次、二十五代松宮亀太郎、二十六代真野忠校長に至る。(西条)

## 19 真野荘

古くは未乃郷といい湖西を掌握する。真野臣が中心となり、土地の開発に尽くす。大和時代は大津に大友郷、堅田、仰木、伊香立を含めて真野郷、北へ小野郷、比良郷と続いていた。平安時代になると律令制度がつぶれてきて土地の私有化が進み、各地に荘園が出来る。真野荘は鎌倉時代から日吉神社の所領で、権弥宣行房の管理となる。普門荘は山門妙法院の荘園、大野荘は同じく妙法院領であった。(都)

## 20 真野の古歌

金葉集 うずらなく 真野の入江の 浜風に 尾花波よる 秋の夕暮れ (源俊頼)

続千歳集 冬枯れの 尾花おしなく 降る雪に 入江もしほる 真野の浦風 (頼政)

新続古今集 近江路や 真野の浜辺に 駒とめて 比良の高嶺の 花をみるかな (頼政)

冬きぬと 尾花の波も 音冴えて 風に乱るる 真野の浦芦 (直好)

歌合 真野の浦 出してみれば さざ波や 比良の高嶺の 月かたむきぬ (重家)

新勅撰集 宮人の 袖の名残りや ととむらん 今もにほえり 真野の萩原 (春風)

真野の浦、真野の浦風、真野の入江が歌集によく登場する。景勝の地として愛されていたことがある。都定さんのところに入江歌集という掛け軸が残っていて興味深いことである。(川中)

## 21 真野の宮座

真野の神田神社の宮座は、主として神事を執行する座で、真野氏が座株を握っていた。ために、「もろと」仲間という。しかし、神事だけでなく、村造りにあたっていたのである。土地の開発、年貢の割り当てなどである。その他の地区は、谷口の八幡神社の右座左座、家田の右座左座、佐川の樹下神社の十人衆、大野の河内神社の右座左座、普門の神田神社の十人衆、みな宮座である。いまでもこの宮座の名残りをとどめ、神事を行っているのがこの地に多い。真野の浜、北村、中村も神社として神田神社の座をもち部落の村造りは衆が相談している。(森)

## 22 真野城

元龜、天正のころ、真野臣の子孫、真野十左衛門元貞は真野北村の昌法寺に城を構え、佐々木

六角に属し、浅井、朝倉の連合軍と戦って破れる。現在昌法寺に西養坊と銘のある五輪の塔は真野十左衛門元貞の墓である。この真野城の一のとりでは地名、小字北村の竹のはな辺りであった由である。この城へは六角の武将も来ており、かなりの広さをもっていたようである。戦国時代、真野氏は数派に分かれ、湖東に住み武将になっている。(都)

### 23 沢の遺跡

原始時代の遺物である石鎗が入江跡近くから発見されている。沢の入江から西側添いである。この辺りに原始人が住んでいたことが証明されている。(森)

### 24 北村の遺跡

浜本嘉男さんの所有田、須原から大和時代の土器が発見されている。須原の地名も須恵器の原という意味で興味深い。出土したのはつぼである。(都)

### 25 一本松経塚

西近江路にある一本松ではなく、北村のうら山にある一山で一本松というのがある。いまは老木が朽ちて若木が植えられてあるが、口伝によると地中に経筒が埋められているという。山すそをねる旧道の側で、登って足をふむといい音がするので何かあると信じられている。経塚というのは、お経を筒に入れて埋めた塚のことである。その近くの小山は寺坊跡が多く、同性坊、東福寺坊などの寺坊が続いている。この地の殆どが売却されたが、由緒ある土地であるので何とかして研究調査しておきたいものです。(西条)

### 26 北村の墓地

昌法寺山即ち、真野城跡に真野城の遺跡とかの五輪の塔があるが、付近は真野四か村の共同墓地がある。中村、沢、北村、浜と区分してあり、墓の入り口は僧の墓石が並んでいる。春、秋の彼岸には祖先の霊を祀るために参拝する人が多い。かつて同性坊にあったという本尊が、昌法寺に安置されていることも記録として残しておく。(森)

### 27 北村のうら手開発

北村の部落のうら手の山は京阪電鉄という会社が購入した。琵琶湖大橋が近くにあり、この辺りを団地化して開発しようというのだ。湖西線も通過するので団地とか遊園地とかの都市化した施設が建てられ、あの一帯は大きく変化するに違いない。そうすればむらの形を残す真野もそうしたような変わり方をするだろうと思う。(小野)

### 28 真野駅

江若鉄道真野駅は四十年前に出来たと聞いた。琵琶湖大橋の架橋によって乗降客は多くなって

いる。江若鉄道が湖西線になるとまた人の流通も繁くなるだろう。だんだん都市化する真野である。(三好)

## 9 浜の記録

### 1 女の十人衆

女のとしより十人が集まって年に四、五回位いごちそうを食べる。これが女の十人衆。十人の中で一人死ぬと次の人が入会する。はいったとき、みんながおめでとうと祝うことになっている。過ぎし女の生活を反省し、死を迎える静かな年を安楽に暮らそうという意義があって、よい会だと思っています。(上原)

### 2 浜のずっかい

生まれて三才になると、親戚の人を招待して甘酒を出してお祝いするという習慣は、今も続いている。招待された人は子供の衣服、はきものを白いなわでくくってもつてくるようになっている。白いなわや白酒を使うのは、白くなるまでという意味がこめられている。即ち、しらがになるまで長生きせよということである。浜のずっかいは民間伝承として興味深いと思う。(上原)

### 3 もちつき田

おもしろい名だ。浜から北村、沢に行く道がたんぼの中にある。その中央にぼくの家の田がある。ふつうもちつきの田とよんでいる。なぜかというと、その田の辺りは入江の堀であって、そこからりっぱな鏡が一面出てきた。めでたいというのでみんながもちをついて縁起を祝ったものである。それからもちつき田とよんでいる。(岡本)

### 4 浜の船入れ

浜の船入れというりっぱな港がある。江戸時代に八幡屋善助という人が真野の漁師のために独力で比良から石を運び、十年間の年月をかけて船入れを造った。八幡屋は佐野さんのところで、善助さんは先祖にあたります。その船入れができてから漁をするのが楽になり、みんなから感謝されたということです。(岡本)

### 5 三宮式部長

三宮式部長は天保十四年に正源寺に生まれ、梅田雲浜頼三樹三郎らと交わり、のち東伏見宮に随って英国に行き、十一年間外国で学び、明治十三年帰朝し、二十八年に式部長になりました。明治二十九年には男爵となりました。東京にいても故郷真野を忘れることなく、たびたび寄進して村人に感謝されたお方です。神田の神宮寺の鐘をとり戻したり、水害で困っている村人のため

に金子を贈ったりして村に尽くしました。亡がらが帰ってきたときは一目拝もうとする村人で沿道がうずまり、堅田から浜まで人垣が続いたといえます。三宮さんの奥さんは外人でした。内外の事情に通じ視野も広く、礼儀正しく、ために式部長という皇室の重要な職につかれて任を全うされた方として、とくに私は記録にとどめおきます。たくさんの勲章が胸についた写真が資料室にあります。顔はとても上品で気品のある姿がみられます。老人はこの人のことをよく話してくれます。(井上)

## 6 浜の遺跡

藤井徳次郎さんの井戸から鎌倉時代の瓦器が出てきている。この時代はまだ湖だったはずなので、興味深い遺跡である。(滝川)

## 7 浜の碑

真野水泳場に句碑がある。高浜虚子の作で、「このあたり 真野の入江や 藻刈船」とほってある。有名な俳人虚子先生がこの地にこられて、藻刈船をみて、かつての名勝真野の入江を思い出された句として、この真野になくってはならない句だと思う。(宮部)

## 8 真野水泳場

明治のころ浜はまだ水泳場一帯は葦(よし)原が多く、泥もあり水泳場になっていませんでした。大正の終わりころから昭和にかけて真野水泳場が注目されてきて、京阪神から水泳客がたくさん来るようになりました。古さからいくと真野と舞子が伝統があります。とくに真野水泳場は遠浅で大衆向き水泳場となっています。地所は神田神社の所有になっています。近年琵琶湖大橋が架橋され、一年中水泳場の砂浜に人がくるようになってきました。松の並木も多く一年中景色のよいところです。(西野)

## 9 琵琶湖大橋

日本一の琵琶湖大橋が昭和三十九年九月にできました。千三百五十メートル、あの橋は東西を結ぶためにつけられましたが、経済と観光の目的をもっているため利用者は多く、有料になっていますが、四、五年もすると無料になるだろうといわれています。日本一の琵琶湖に日本一の琵琶湖大橋がにじのように架かっているさまは見事です。この橋から西の比良、比叡の名山は一望で、南に遠く大津の街が、東には三上山から沖の島、北に竹生島から伊吹山まで、かつての歴史を秘めたる近江の山野がみわたせます。全国からこの橋を見に来て、雄大な眺望に感心して帰ります。ぼくたちは琵琶湖大橋完成の前日、建設された谷口久次郎知事に喜びの手紙を出しましたら、開通式の日次のような知事さんの手紙に接しました。「お手紙ありがとう。君たち真野小学校六年の諸君の手紙を読んで、これほど喜んでくれたことを嬉しく思う。建設中はいろいろ苦勞なこともあったが造ってよかったと思っている。恐らく琵琶湖大橋が架かって、あの辺一帯は東京のように変化することだろう。いろいろなものを造ってみる、ところが土地がいくら発展してもその土地に住む君たちが立派ならなければなんにもならない。よく努力して立派な人になっ

てください。」とあった。たしかに知事さんのおっしゃるように、土地がいくら発展しても住む人が発展しなくては土地についてゆけない。人間自身が問題だ。ぼくたちは知事さんの手紙を読んで、明日の真野、堅田、いな滋賀県、日本をになうため、一日一日たえず努力しようと誓ったのである。(宮部)

## 10 母子草

昔、西江州から東江州のほうへ奉公にいていた女の子があった。主人はひどい人で、この子を酷使する。女の子は毎日湖辺へ水を汲みに行くと、そのたびにきつと対岸の西江州を望み、母を慕って泣いていた。寒い冬の水仕事は女の子にとっては耐えられない苦しみだった。ある日のこと、水汲み桶をかたわらにおいて、女の子は「かあさん恋しい」と涙を落としていた。すると不思議、女の子の流した涙が湖水に浮かんで「かあさん恋しい」の水文字になっていた。そのむこうに七色のにじがかかっている、そこに美しい女の人がほほえみながら手招きしていた。「その水文字に祈りなさい」と。女の子は水文字に祈った。するとその水文字はするすると動いて懐かしのふるさとに着いた。女の子の降り立った湖畔から我が家まで、全体に白色の綿毛をつけた黄色の草が生えていた。女の子は草に誘われるように母のいる我が家へ急いだ。「かあさま、ただいま」と声をかけたが母の返事はなかった。女の子の帰る前日、母は亡くなっていた。村人の話では、亡くなった母も女の子を恋しいと思い、毎日浜辺に出て「わが子恋しい」と泣いていた。その涙が草になったのだと。そして草の名を「母子草」と名づけた。この話は民話の形をとっている。女の子の名前はちさ。にじの中にあられた女の人はちさの母の化身とも、竹生島の妙音天女神であるともいい伝えている。また女の子が働きに出かけたのは母の病気を治すためだったともつけ加えている。この民話を素材として映画、童話、紙芝居などがたくさんある。

(上原)

## 11 浮きはえ流しもち

琵琶湖の鳥獵のうち、独特の歴史と伝統をもっているのが「浮きはえ流しもち」である。古法漁法の技術として民俗学的にも興味をもたれ、無形文化財に指定しようとする動きもみられる。現在この技術を保持している人は真野浜の佐野平治さんで、佐野さんは堅田町の漁業組合長もしている。「浮きはえ流しもち」とは、はえ(茎)を湖上に流し鳥をとるのでこの名がある。全く原始的な獵法で太古から続いたと思われる。記録の上では、鳥類の貢納等で室町時代から古文書にあらわれているが、もっと古くからあったと推定されている。まず獵の前日、一キロから二キロまであるつるのようなはえに静岡・和歌山から手に入れたもちを火で熱し、やわらかくしながら練る。翌朝、午前二時ごろ、浜の船入れから流しもち船が出る。冬季の十一月から二月まで行るので、寒さが身にしむ。二、三月の鳥船と湖上の場所割を決め、仕事にかかる。しるしの旗をまず湖上に落とし、はえを流す。ところどころにおとりの木で作った鳥をはさんでおく。延々一キロから二キロ流す。風の動き、水の流れを考えながらである。一方水鳥は湖辺のえさを腹いっぱい食べて、湖に帰って仮睡して浮いている。ちょうどはえと水鳥を垂直に流し、もちにその羽根をつけるのである。午前五時ごろより夜明けの一瞬、すばやくはえをたぐりあげて水鳥を捕獲する。二、三十羽かかるときもあり、二、三羽というときもある。長年の勘によって行うのであるから、伝承者でないとうまく行かない。月のある氷つくような厳しい寒夜が、だいたいよいとい

われている。昔は鳥も漁業になっていたが、目的物が水鳥であるので農林関係の部になっている。近年この「うきはえ流しもち」を禁止しようとする動きもあって、古来伝統あるこの鳥獵を残そうと鳥仲間(県下で十人)努力している。琵琶湖独特の由緒ある伝統技術を残すことは大切なことで、永久に保存伝達されることを僕は望んでおく。(岡本)

## 12 真野の漁師

琵琶湖全域に漁場を拡げ、湖せましと活躍した堅田の漁師はあまりにも有名であるが、その堅田の漁師の先祖は真野の漁師であるとのこと。堅田にある古文書に、「真野の漁師、堅田に居初めて漁をし、渡しもりをする。」という記事があるが、堅田の地突き きが出来ないころは真野の湖辺で漁師が盛んであった。平安時代の末から鎌倉時代にかけて、堅田漁師が台頭してくると真野の漁師もその一群となって活躍する。堅田漁師の区分は西の切が大網、小糸、東の切が流し釣り、立場(たてば)は流しと釣りであった。立場は沖の島、伊庭立場で、真野の漁師は東の切に属し、流し釣りが専門だった。鎌倉から室町時代に至り、堅田漁師が全盛するに及んで、真野の漁師も繁栄する。大網、小糸、流し釣り、流しもち各種の漁法を使い業に励む。やがて江戸時代になると、漁業の外にも運送もやり活発に働く。その名残が浜の船入れである。明治維新以降になって、この地が水泳場となって観光遊覧地と化してくると漁師も減り、現在では佐野家、浜本家、藤井家、内池家などである。それでも四季四季の魚貝は豊富にとっている。その辺に行くといまも魚の匂いもし、網干し場や漁師船が船入れにあつて、在りし日の真野漁師の歴史を物語っている。(西野)

## 13 琴ヶ浦

真野水泳場を普通、川先きといっているが、古名は琴ヶ浦である。琴ヶ浦は真野浜から今堅田の浜辺にかけて続いている。今、琵琶湖大橋ができている処はこの浦の中央にあたる。この浦の有名な匂当内侍入水の話が伝承されているので記録しておく。匂当内侍は藤原経卿の女、新田義貞の妻。後醍醐天皇のころ、延元元年五月、足利高氏(尊氏)が反旗をひるがえし、新田義貞は京都・兵庫に戦ったが、利なくこの年の十月、皇太子恒良親王、尊良親王をつれ越前に下るとき、匂当内侍を琴ヶ浦の苫屋にとどめられる。内侍は三年の間この地にて義貞の帰りを待つが、不運にも新田義貞は延元三年七月二日、越前藤島の地にて戦死。それを聞いた匂当内侍は発狂し、九月九日、義貞のあとを追うため琴ヶ浦に入水自殺する悲話である。月のよい晩、たもとに石をいっばいつめて、笛を吹きながら湖に身を投げた匂当内侍は年わずかに二十二才であったという。いまも琴ヶ浦の森、琵琶湖大橋の近くに内侍の霊は残っているのである。(井上)

## 14 真野川の合戦

真野川周辺で起こった歴史上の合戦について、時代別に記録してみようと思う。平安時代の末ごろ、平治元年(西暦一一五九年)平治の乱がおこり、源義朝(みなもとのよしとも)が京都で破れ真野川近くで合戦する。平清盛の追手のために兵を多数失い、この地より船を出して東国に逃れる。寿永三年(一一八四年)、木曾義仲、平家の軍を真野周辺で追撃し、京都に入る。のち、瀬田・

粟津の戦いで破れ死ぬ。このころ、源義経、京都鞍馬からこの地を通り、鏡山で元服する。南北朝時代、延元三年(一三三六年)、新田義貞一行、北陸に落ちる。室町時代、戦国の世、文明十一年(一四七九年)、佐々木六角の武将、多賀高忠、真野川をはさんで合戦に及び敗走する。永禄十一年(一五六八年)、真野城主真野十左衛門元貞、この地で浅井・朝倉の軍と戦い破れ、真野城焼失する。真野の多くの民家も焼ける。元龜二年(一五七一年)、織田信長、比叡山延暦寺を攻め、そり堂塔をことごとく焼くに至る。真野川周辺の天台宗系の寺社、大野坊、普門坊なども続いて焼き払う。この時、真野坊焼き払いのため、古文書、寺宝の多くを焼失する。天正元年(一五七三年)、足利義昭、織田信長に反し、真野川水域に立てこもる。このとき、織田信長の先軍は、陸路羽柴秀吉、海路明智光秀であった。義昭は真野川南流をうまく利用し、水城を作って防戦したが破れ、真野から途中に至り宇治に逃げる。そして死ぬ。足利幕府が亡んだわけである。天正十年(一五八二年)、豊臣秀吉、明智光秀の軍、天王山で戦い、明智治政ノ湖西に軍馬が動く。その後、江戸時代にいたって真野川一帯は合戦なく現在に至る。この真野川周辺の歴史もまた、近江真野の歴史であった。平安時代から鎌倉、南北朝、室町にかけて日本歴史が物語っているような戦乱の歴史であった。まして、京都に近く、その影響もかなり受けている。しかし、真野川周辺に住んでいた真野の人たちは、古代から中世、近世にかけて、先祖の遺産を守るために田畑の営みに努力するのであった。かつて戦乱に巻き込まれた真野川に水泳場ができ、日本一の琵琶湖大橋が架かった。昔日の面影はどこへ行ったか。明日の発展が心強いのである。(岡本)

## 10 おわりに

真野小学校 担任 横山幸一郎

表題に掲げた「むら」は「村」ではなく、古い「むら」のにおいのする土地、つまりかつての素朴な農村という意である。その「むら」に焦点をあて、綴ったのが「むらのきろく」である。

真野の歴史は、土地の歴史的な流れを史学の立場から論述したもので、前者を児童生徒に、後者を筆者が担当した。この土地に歴史があって資料がない ということを補うためと、自分の土地を誇り、土地に対するイメージを希(こいねがう) ということ。この二面を動機として研究を始めた。さいわい四年間担任を続けたので予定通り進行した。この間、大病を患って二、三か月学校を休み迷惑をかけたが、「近江郷土史辞典」なる書を公刊して再起し、この研究の後半は、ともども協力して完成にもつていった。

昭和四十年三月十九日、担任児童四十四人は「むらのきろく」を卒業文集として巣立ちゆく。巣作り充分であったのかどうか 文集のみでなく、全面にわたって相済まないと思っている。児童が去ったあと、この記録をより充分なものとして、それがただひとつ私のできる報いだと悟ったのである。



編集

佐久間宗勝